

地域の農業を地域で守る挑戦



NPO法人 鳴子の米プロジェクト
理事長 上野 健夫

宮城県大崎市鳴子温泉の位置

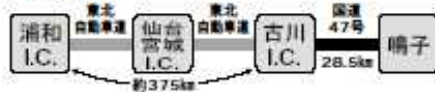
大崎市鳴子温泉

各交通のご案内

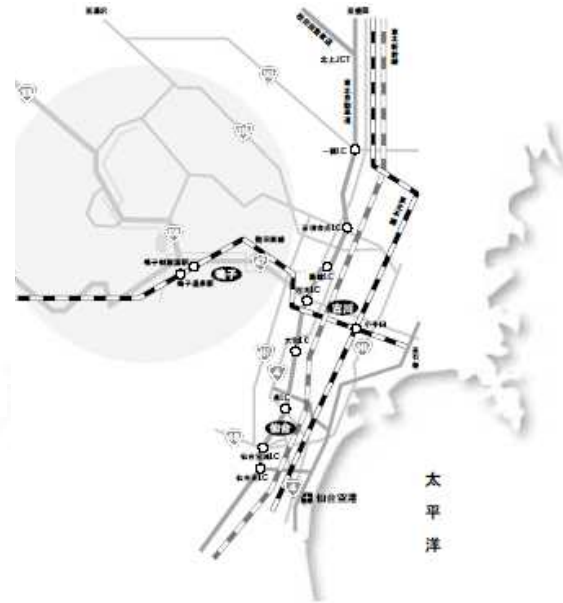
●電車 (JR) で



●お車で



●飛行機で



宮城県大崎市鳴子温泉の特徴

「温泉」と「こけし」の町

日本国内で湧出する11種類の泉質のうちの9種類が鳴子で湧出するため、他では味わえない体験ができる。

バブルの崩壊と観光客の減少

バブル最盛期には年間200万人以上の宿泊客も、近年は70万人程度に激減。観光業界も厳しい状況。

急激な過疎化と高齢化による耕作放棄地の急増

若者の都市部への流出に加え、高齢化も追い打ちした形で耕作放棄地が10年で100ヘクタールも増加するなど、中山間地の農業は危機的な状況にある。

農政の変化と地域の実情

大規模化 集約化を目指す政府の政策は、中山間地に当てはまる項目がなく、中山間地における営農に大きな不安を抱える。



耕作放棄地はこうして拡大していく

手前は地域振興作物（ブルーベリー）が植栽され、よく管理されている転作田であるが、写真の右半分は耕作放棄されすでに5～6年が経過し、ススキや雑木が生い茂り、田んぼの形跡すら確認できない状況になっている。こうして、山間地の耕作放棄地は人目につかないところや、利便性の悪い場所から病魔のように広がっていく。



(大崎市鳴子温泉鬼首地区にて撮影)

鳴子の米プロジェクトのスタート

本来の農業の在り方を模索

「やませ」の影響を受けやすく、冷害の常襲地域だった鳴子でもきつと美味しい米が出来るはずと、山間地での栽培に適した品種の米を自らの手で試験栽培し、山間地向けの新しい米「ゆきむすび」と出会う。

作り手と食べ手の新しい信頼関係の構築

米作りを農家だけの問題にせず、観光地鳴子に欠かせない田園風景を生み出す地域の営みと捉え、地域全体で支えていくことを呼びかけた。生産者(作り手)と消費者(食べ手)の新しい信頼関係を築くべく活動を展開。田植えや稲刈りの体験交流会を通して意思の疎通を図るとともに、米に対する価値観を共有することで相互の信頼関係を構築した。

地域の農業を持続していくために必要な価格の提示

この地域で古くからおこなわれている「くい掛け」による乾燥の再興により、単なるコメ販売ではなく地域に伝わる文化を米にのせることで「物語という付加価値」をつけた。さらに、自分たちが生産した米に対し自ら価格設定するとともに、この価格なら地域の田園風景を守るために作り手が頑張っていけるということを、積極的に食べ手に伝えた。



若い力の活用

中学生 高校生 大学生への学びの場の提供と活動支援

地域の農業の実情を伝える講演会の開催 農作業体験修学旅行の受け入れ 卒業論文作成のための支援等

学生を媒体とした情報の拡散

多くの学生が「米プロ」で学び、社会に巣立っているが、その学生が自らアンテナとなって情報の発信と人と人とのネットワークの拡大に大きな役割を果たしている。



消費者（食べ手）への教育活動

食の哲学塾の開催

作り手 食べ手双方がメリットが生み出せるための、価値観を共有するための勉強会を多方面から講師をお招きし、参加対象 開催場所などを変えながら、「作り手」と「食べ手」のネットワークを広げていくための事業を展開。

CSAを意識した活動

活動当初からCSA(Community Supported Agriculture)を意識して活動。アメリカなど、近年急速に発展しているCSAの仕組みを研究し、中山間地の農業のこれからの展開を模索する。



地域に根差した活動

「むすびや」のオープン！

2009年地元の皆さんから「ゆきむすび」を食べる場所がないとの要望から、米プロの情報発信基地として川渡地区に「むすびや」をオープン！多くの人に愛される店になった。しかし、2011年 東日本大震災により施設が倒壊。やむなく休業することになる。早期の復活を考えていたが、原発事故による風評被害など、厳しい組織の運営を強いられる中、クラウドファンディングによる資金調達で、「むすびや」を復活。支援者らの来店もあり、山中の店舗にもかかわらず人気を博している。



取り組みによる効果と今後の課題

耕作放棄地の減少

「ゆきむすび」の主な生産地域である鬼首地区において、平成22年から平成27年にかけて、耕作放棄地が73haから59haに減少した。食べ手による適正価格による買い支えによって、耕作放棄地の増加に歯止めをかけることができた。

止まらない生産者の減少

一方で、平成22年から平成27年にかけて鬼首地区の農家数は190人から154人まで減少するなど、減少に歯止めがかかっていない。鳴子に代表されるように、中山間地域ではいまだに区画整理されていない圃場も多く、大規模化、集約化が非常に難しいのが現状である。

少ない人数で農地を守っていくことは困難。世代交代をどう進めていくか、新たな担い手をどう確保していくかなどが作り手側の課題となっている。

また、作り手と食べ手が一緒になって地域の農を支えていくという取り組みの原点に立ち返り、両者の関係を状況に応じて進化させていく(※)ことも必要となっている。

※高齢化の進展を受け、平成25年度より、全て「くい掛け」による乾燥を行ってきた仕組みを改め、コンバイン生産との2本立てとするとともに、「くい掛け」生産の米を24,000円から30,000円に値上げを行い、コンバイン生産の米を24,000円とする改革を行い、食べ手に対し理解を求めた。